

中国文学批評通史緒論訳注：《金元文学批評史・緒論》（上）

甲斐，勝二
福岡大学人文学部

東，英寿
鹿児島大学法文学部

<https://hdl.handle.net/2324/19710>

出版情報：福岡大学人文論叢．31（2），pp.1391-1413，1999-09．福岡大学研究所
バージョン：
権利関係：



中国文学批評通史緒論訳注

《金元文学批評史・緒論》（上）

甲 斐 勝 二
※東 英 寿

翻訳に当たって

今回は先回の翻訳で扱った南宋と同時期、中国の北半分を占めていた金代の文学批評、及び金と南宋を滅ぼし世界帝国として欧州東部にまで君臨した元の文学批評を一括して論じた《金元文学批評史》の緒論の前半部分を訳出する。この《金元文学批評史》は、『宋金元文学批評史』として上下二冊にまとめられた書籍中、最後の第四編とされるものである。本来なら一回の掲載で終わらせるべきではあるが、紙幅の関係で（上）（下）に分け、今回は（上）の部分を掲載する。注釈は、原書の記述に基づいて付けた。出典にはなるべく当たるようにしたが、すべてに当たれたわけではないことを断っておく。

この《金元文学批評史・緒論》は劉明今氏の手になるものと前書きにある。前回訳出した《宋代の詩話・詞論・小説批評と理学家の文学観》の中で既に氏の名前は出ていたし、翻訳上の指導もいただいていたのだが、部分的な執筆でもあったので、氏の紹介を欠いていた。よって、ここに簡単ながら記させていただく。

劉明今氏は1944年生まれ、1967年に復旦大学中文系を卒業、上海京劇院・上海昆劇団で脚本の制作を担当、多くの脚本もあるとのこと。現在は復旦大学中文系副教授で、中国文学批評史研究室主任。著書に《中国文学批評方法論》があり、昨年度まで神戸市外国語大学にいらっしまったので、知る方も多いと思う。

* 鹿児島大学法文学部助教授

さて、今回訳出する部分は、中国史のみならず中国文学史を考える上でも、非常に特色のある時期に関するものである。と言うのは、中国に所謂異民族支配が行われた金と元の時代を扱うからだ。劉明今氏も、かなり苦勞された事と思うが、個人個人の評者を対比しながら取り上げ、当時の批評の情況と明代の文学批評との関係を手際よく紹介している。しかも、元好問の批評態度を論じながら矛盾は矛盾として遣し、一概に論断しない記述からも知れるように（原書第四編第二章第三節元好問の部分を参照）、その論述には慎重な態度が伺われる。

しかしながら、時代が時代だけに、いろいろと考える事も多かった。というのは、訳者の二人の間に以下のような議論、つまり「中国文学史が語られる時、しばしば無視される異質の言語文化の存在を如何様に位置づけるべきか」という議論が交わされるからだ。これは甲斐が西南の少数民族白族に関心を持ち、東が湖南の少数民族土家族に関心を持つからであろう。通常漢族が主体の国家であればこの問題は大きな問題としては立ち現れてこないのだが、異民族に支配を受けた時、その異民族の言語文化と漢族の言語文化は政治支配の位置からすれば支配被支配が逆転する事になる。これは非常に興味のある問題である。以下この問題についての覚え書きを記させていただく事にしたい。

漢語漢文の文学研究に携わる我々の多くは、中国が本来漢語や漢字以外で語られる文明を域内に持つ多元文化国家であり、今もそうであることをしばしば忘れがちになる。なぜならば、多くの場合、扱う資料が漢語漢文で語られるものばかりだからである。確かに、現在の中国が多種の民族で構成されているとはいえ、そのうち人口比94パーセント近くが漢族で、残りの6パーセント余りを少数民族が占めるにすぎないし、中国の歴史を振り返っても、漢民族が中原を支配していた期間は圧倒的に長く、残された文学も漢語漢字文で記されていたのだから、それは当然といわねばならない。

ところが、本訳注で取り上げるのは、金、元の文学批評史である。周知のようにこの両国は、金が女真族、元が蒙古族という非漢民族国家であり、とりわけ元は歴代始めて中国全土を支配した異民族であった。そこには漢族とは違った言語文化の流入があったはずだ。特に、元の社会構造は、徹底した身分制による統治が行われており、支配階級である蒙古人、色目人が、漢人、南人を支配するという構図、すなわち全人口の僅か3パーセントに過ぎない蒙古人、色目人が、97パーセントの漢人、南人を支配するという、少数の民族による中国統治という事態が約百年続いたのであった。もし支配者に注目するならば、

「異民族である元の文学を考察するに当たって、当然漢民族とは違うその民族独自の資料に基づくことが必要である」という意見も出てはこないか。しかしながら、元は口承文芸が中心で資料が伝わりにくかったこともあり、また、被支配民の多くが漢人であったためであろう、本批評史も専ら漢族側からの資料に基づき考察を進めることになっている。もちろん本批評史では、金や元の少数民族の比較的遅れた文化が漢民族の先進的文化との衝突の過程で、融合し同化して発展したという点是指摘されている。この事は異文化の接触が引き起こす文化発展の可能性を指し示すものだが、結局漢族側からの視点で分析を続けようとする伝統的な態度に基づく事にもなってしまった。

確かに、今日から見た中国文学批評史は、漢語漢字文によって書かれ続けた文学を対象にせざるを得ない状況があり、また資料面から見ても、こうした立場に立たざるを得ない事情がある。けれども、文化の衝突の過程は（その詳しい検討は作品の変化を扱う文学史の側の問題だとしても）、もう少し詳しく跡づけてほしかった。というのは、それによって従来の中国文学批評史とは違った視点からの考察が可能かもしれないからだ。たとえば、異民族の文化伝統によって引き起こされる書き手及び批評者としての知識人の環境の変化と、それによって生み出される新しい批評の姿勢や思想的拠り所（つまり所謂正当性）の問題、或いは享受者の嗜好から導かれる批評論の変化などについても、異文化接触という視点からもう少し踏み込んで記述することもできるのではあるまいか。

ついでに述べれば、元の場合、少数の民族による中国の支配、多数の漢民族の文化と少数の蒙古の文化の接触という観点から論及する事、それはあくまで中国という領域に視点を据えた場合の構図に過ぎないことも指摘しておきたい。実は当時のモンゴルは、東は中国から西はロシア、アナトリア、東地中海沿岸の領域までを手中に収め、ユーラシアの東西を押さえた、いわば世界国家だったのである。モンゴル高原を中心に東西へと広がった版図の東の一領域が中国なのである。とすれば、モンゴルの文化や文学の全てが漢民族の文化と同化し発展したと考えるのは、モンゴルという国家の一部分しか見ていないことになる。ユーラシアを押さえていたモンゴルは、たとえばヨーロッパ、トルコ、イスラム等の各地域の文化と接触したわけで、それらとの関連を考慮しないと当時のモンゴル文化の全体像は描出できない。従って、モンゴルの文化や文学の発展や同化は、より複雑で多様性を持つと言えるであろう。モンゴルを中心にして当時の情勢を概観すれば、ユーラシアに展開したモンゴル帝国の東の一領域で、漢民族の文化との接触があったのであり、それはあくまでモンゴルという国家の東の一領域部分を切り取ったにすぎないということを確

認しておく必要があろう。もちろん、ユーラシアに展開した領域まで含めて考えることは、現在の漢語文学に連なる批評通史の中ではそもそも無理な話である。なぜならば、元であろうと金であろうと、またその後の清であろうと、所謂中国の知識人は、支配者の言語や文字の影響を蒙りつつも、多くの者の意識としては漢語漢字文によって伝えられる中華の文化伝統の上にあったのだから。できることと言えば、かように広がった元の時代の文化的な刺激が漢語・漢字文化の思想や文学批評に与えた影響を指摘する事くらいだろう。ならば、広大な領域に広がった元全体の文学を研究しようとすれば、元を生み出したモンゴルの文学史研究にその成果を待つべきなのであろうか。だとすれば、中国文学史の研究ではこういった漢民族以外の文学史研究との協力も必要になるだろう。そこには比較文学的研究法や異文化接触に注目する文化人類学的手法も要請されるはずだ。この問題はなお考えてみたい*。

そのほか、異民族支配時の文学を研究する場合、通常は隠れていて現れない事柄が問題になる事を知り、中国の言語文化の展開を考える上でも大いに考えさせられた。このことについても筆者である劉明今氏に感謝したい。

最後に、金の文学史や文学批評史について簡単に触れておく。異民族の金は元と違い、漢民族の文化に同化しようとした民族である。その証左としては、元においては当初廃止された科挙も金では盛んに行われ、多くの官僚を登用したことが挙げられよう。こうした情勢の中、金の文学に言及する際に、元好問（1190～1257）の存在は抜きにして考えられないと思う。元好問は、その先祖が拓跋氏（鮮卑族の一部）で、仕えた王朝は女真族の金で、蒙古族の元に降伏しているが、その文化的素養は漢民族のそれであった。民族という視点に着目すると、彼の置かれていた民族環境は複雑で、このことは彼を考察する際に無視できない要素となるであろう。元好問は滅亡した祖国・金の資料を収集すべく各地をまわり『中州集』十巻を編纂した。これによって金の文学の情勢を窺うことができるのである。『中州集』は、金一代の詩の全集といえるもので、採録された詩人は249人にものばり、しかもそれぞれに詩人の小伝を付して、今日に残された有力な資料となっている。異民族なるが故、今日に資料が伝わりにくかったなか、元好問が『中州集』を編纂し

* 近年、文学史の中に少数民族文学を位置づけようとする動きが中国の文学史研究に見出せる。例えば中国社会科学院文学研究所・少数民族文学研究所張炯・鄧紹基・樊駿主編《中華文学通史》（1997-9）及び劉亞虎著《中華民族文学關係史》（南方卷）人民出版社1997-12等参照。

これがいかなる意味を持つかについては後日あらためて論じてみたい。

ていたのは幸いであった。現在、金の文学史や文学批評史は、この『中州集』に基づき構築されていると言っても過言ではない。このような文集が見いだせなければ、金の前に存在した遼のように批評史に取り上げられなかったかも知れないのだから。

以上、覚え書きの部分も含めて、御指正を願います。

《金元代文学批評史・緒論》

金・元の時代は中国文学批評史発展の歴史の中で非常に特殊な時期である。詩文批評について言えば、金元代に先立つ宋代およびその後に来る明代に比較して、かなり寂しく見える。それは第一に批評の大家が少ないからであり、次には流派の分かれが少ないためである⁽¹⁾。王若虚・元好問・方回などが、文風を正し、詩学の創建を自分の仕事として、非常に特色のある專著をいくつか世に伝えた以外、その他の作家は概ね批評をたいして重んぜず、わずかに詩文の序跋の中でその思うところを興に任せて記した程度である。しかし、金元時代、とりわけ元の時代、士人たちの思想はかなり自由で、活動的でもあった。彼らは宋や明の文人たちのように科挙⁽²⁾と理学⁽³⁾の束縛を受けなかったのである。彼らの中には地位の高い官職に就いたものは少なく、中には生涯官仕えをせずに、在野で気ままに暮らした者もいた。このため彼らの詩文批評には各自独特の理解の仕方があった(ただし、このような新しい視点は閑いては消えてしまい、互いの議論によって強化されたり深められたりして大きな影響を作り上げることはなかったのだが)。よって、我々はもし眼差しを僅か数人の大家に限るのではなく、文学思潮を反映する視点から幅広く資料を集め、多くの断片的文献から発言の断章に至るまで、みな集めて考察を加えるならば、金・元詩文批評の筋道が明快に見えるはずだ。それは前は宋代の末を受け、後は明代三百年を啓くもので、そこには豊かな含蓄があるばかりではなく、その時代の鮮明な特色もあり、中国文学批評の発展における欠くことのできない部分なのである。この他、金・元の時期の詞・戯曲・小説の批評でも新しい進展があった。とりわけ戯曲批評は元雜劇が盛んに行われるに従ってだんだん成熟へと向かい、明清の戯曲論の発展のためにがっちりとした基礎を作ったのである。

一 宋代詩歌の発展に対する反省

宋詩はそれ以前とは全く違った発展の路を進んだ。北宋の王安石は「世間で好まれるよ

うな言語表現は、すでに唐の杜甫がみな言ってしまったし、世間が嫌うような言語表現は、白居易がもうみな言ってしまった」（《苕溪漁隱叢話・前集》卷十四引く）と述べていた。よって「大きな牛の肛門に張り付いている（従属的な位置のたとえ）」という誹りから逃れるためには、新しい格調を創り出す必要があったのだ。当時文壇の領袖であった歐陽修も、その《六一詩話》で梅堯臣の「内容は新しく言葉は巧み」という語を引いて、晩唐の詩人は「もはや李白や杜甫の豪放な格調はないけれども、彼らも作詩にあたっては精魂を傾けて細やかな内容の作品を作り出した」と認めていて、そこには宋人の新しい芸術鑑賞趣味を表明していたのである。宋詩の風格は元祐年間にながらりと変わった⁽⁴⁾。所謂蘇（軾）黄（庭堅）の詩風へ向ったのである。蘇軾の詩は独特で自由、黄庭堅の詩は奇抜で新しいと言うように、二人の詩風はずいぶん違うのだが、詩作りでは共に内容を重視して、理性的な筋道を導び、また典故を好んで用いて、押韻も巧みさを競うところなど、その気風はよく似ている。この気風は唐詩のもつ自然な蘊蓄、情趣豊かな境地という風格とは明らかに違うものだ。宋詩としてのはっきりとした芸術風格はここに形成されたのである。黄庭堅の流れは北宋南宋の交代期に流行し、江西詩派を形成した⁽⁵⁾。江西詩派の内情は非常に複雑で、ある者たちは出典の用い方を専ら評価し、ある者たちは難解でゴツゴツした文体を意図的に作った。しかし、ある型を備えしかもその型から外へ出ることができる者もいて、「流れるようなまろやかさ」の者、「豪放で思いのまま」の者もいたのである。とはいえ、江西詩派を導いたのは、唐の詩人、とりわけ盛唐の詩人とは異なる詩風だった。その新しい変化の特徴や、ゴツゴツして難解なところが引き起こす問題点は共にかなり明らかである。よって、江西詩派が形成されると同時に、江西詩派に対する反省や批判もまた生まれた⁽⁶⁾。北宋末の葉夢得の著した《石林詩話》や、南宋の初め張戒が著した《歲寒堂詩話》は、共に江西詩派に厳しい批判を与えている。

金は北宋が統治していた中国の北部を受け継いだので、詩歌創作と詩歌批評の分野では北宋の影響を自ずと強く受けた。金・元好問⁽⁷⁾の《跋趙秉文和擬章蘇州》には、「百年來詩人の多くが蘇東坡と黄山谷を学んできた」と言う。彼の《中州集》⁽⁸⁾の小伝では金の初めの施宜生が「蘇軾の影響を大いに受け」、大定年間（1161-1189）の王寂が「蘇軾の意図を真似すること実に甚だしい」と言い、劉仲尹を「黄庭堅に参じてその法を手に入れた者」としている。劉祁の《歸潜志》でも、劉仲尹を「詩がうまく、江西の諸公を学ぶ」と言い、その他、金代後期では張渾の「詩は黄魯直の格調を学び」、雷淵は「詩に蘇東坡や黄山谷を交えて新奇さを好む」と称している。金の時代、初めから終わりまで蘇軾・黄

庭堅を学ぶ者がずっと輩出され続けていたのが分かるだろう。しかし、これはある一面だけの情況に過ぎず、当時金と対峙していた南宋の詩壇がすでに各流派に分かれ、黄庭堅・陳師道を宗主とする中にも、四靈⁽⁹⁾・江湖派⁽¹⁰⁾及び嚴羽⁽¹¹⁾等にいたるまで、江西詩派を厳しく批判する者がいたのと同じ情況であった。金の人々は蘇軾に対しては、一般的にかなり崇拜しているのだが、黄庭堅となるとそうではない。まず、周昂は死ぬまで黄庭堅の詩を好まず、「黄庭堅の詩は新奇さが得意だが、杜甫を越えることはない」、「宋の文学も黄庭堅までになると偏屈になり、陳師道以後は、その弊害に耐えられなくなった」（《淳南詩話》）と言う。李純甫⁽¹²⁾は黄庭堅の詩を評して「正しい位置に預かることなく、素人の參禅のようなもの」と言い、後の江西派には更に「上は細やかな彫琢に努め、下は人まねと剽窃に努める」（《中州集・劉西崑詩小序》）者だと言っている。その後の王若虛⁽¹³⁾になると、黄庭堅攻撃に力をふるい、その「換骨奪胎し、鉄を金に仕上げる」方法を「ただ剽窃のずるさを言うばかりだ」と述べている（《淳南詩話》）。元好問の《中州集題辞》の中にも、「北人は拾わず江西の唾」の句があるのはこのためだ。金の人々の宋詩への態度が分かるというものだ。彼らは蘇軾や黄庭堅の詩風の影響を一方では受けながら、別の面ではその新變の流弊に反省を加えたのである。よって、彼らがその眼差しを唐の詩人や唐以前の古詩へと転じたのは実に自然だった。だから、詩論の中には明らかな復古の傾向が見えるのである。その代表が趙秉文と元好問であった。

趙秉文⁽¹⁴⁾は金が貞祐に南に渡って⁽¹⁵⁾後に文学復古の氣風を導いた人物である。彼は当時の詩作が新しさをてらって、先人とは違う傾向を打ち出すことに努めたことに反対し、廣く古代の詩歌に手本をとるように主張した。彼は譬えを用いて「物を計るのに天秤を用いず、腕前の良い大工でも物差しを使わず、ただ心のままに行うのでは、一生かかっても成功するものではない」と言う。そこで、「詩を作る者は《詩經》・《離騷》・《文選》・《古詩十九首》を、下っては李白・杜甫を師とすべきである。」（《答李天英書》）と説くのである。趙秉文は宋詩の學習を提唱せず、元好問もまた同様だった。元好問は有名な《論詩三十首》⁽¹⁶⁾の中で、「それから百年が過ぎ古雅の氣風はずいぶん遠くなったが、元祐年間には詩人が次々に現れた。王安石に学んだと言いたがらないのにも些か問題があるが、いったい何の罪で歐陽修と梅堯臣を排除しようとするのか」と歌う。彼は歐陽修・梅堯臣の詩を無視してはならないと考えるのだ。その理由は、彼らが「古雅の氣風」を提唱し導いたからであり、元祐の詩人（蘇軾・黄庭堅）の存在意義も正しくその「古雅の氣風」の一部を保持していた所にあるからだ。元好問は《東坡詩雅引》を作って、「近・古」の

標準によって蘇軾の詩を測っているのだが、そこで彼は、蘇軾の詩の中の陶淵明や柳宗元に似た醇朴で典雅・枯淡な部分だけを評価し、その他の宋詩の風格を代表する新しい姿をつまらないものだと考えるのである。さらに蘇軾・黄庭堅の後の二人を模倣する者たちに対しては、齒牙にもかけず、「蘇軾の門下に忠臣がいたとすれば、どうして受け継いだ彼の詩風をあれこれ新奇なものへと変えてしまうだろうか」、「詩の評論にどうして黄庭堅を崇拝する必要があるか、これまで私は江西詩派の社人なんかになったことはないのだから」（《論詩三十首》）と論じている。

元好問と嚴羽は時代を同じくし、一人は北で、一人は南で、共に宋詩の変化に対して厳しい態度で反省を行い、唐を師範とし、漢魏を師範とする復古の説を掲げた。これは二人の詩論の共通するところであったが、二人の復古の出発点と理想はずいぶん違ったのである。嚴羽は宋の詩人が「文字表現の見事さを詩のすばらしさだと見なし、知識に優れるところを詩だとみなし、論の巧さを詩だと見なす、そんなことにどんなに腕を磨こうとも、結局は古人の詩には及ばないのである」と批判した。だから彼は「詩にはそれとは別の興趣（別趣）があるのであり」、「理論的な筋道とは関わらず、言葉上の議論に落ちないのが上等なものだ」と言って、詩の「透き通って響き渡るもので、がちがちに固まらない」芸術的な特徴を強調し、盛唐の詩歌を目標として求めたのは「もし己の詩を古人の詩の中に置き、識見のある者に見せたとしても古人のものと区別ができないようであれば、正しく古人の精神を手に入れたのだ」という所まで至ることであった。元好問の場合はそうではない。彼は正しいか正しくないかによって詩を判断したのであって、その出発点は儒家の伝統的詩学観であった。その《論詩絕句》の初めに「漢代の歌謡・魏代の篇章は長い間様々な評価がされてきて、その正しい姿については誰も細かく語った者がいない」と言う。ここに言う「正しさ」とは芸術風格においては曹植・劉楨の感情の高ぶり、阮籍の沈鬱な気分、陶淵明の天真な醇朴さ、《勅勒歌》の大らかさとして顕われてくるもので、本質的には「誠」に他ならない。元好問は「唐代の人々の詩は基づくべき根本を知っていたのだろうか、温和で仁義に敦い言葉が何とも多いことではないか」（《楊叔能小亨集引》）と言うのである。「根本を知る」点にあっては、元好問は古人との合致を求めている、儒学の伝統に立つ詩論の保守性と局限性を顕わしているけれども、芸術的な表現の面では、嚴羽ほどの不自然さはなかった。元好問は「前代の詩人たちが作った詩は、その時々によって変化しており、その体裁を一つにするような事はなかった」（《双溪集序》）と指摘している。よって詩歌の最高の境地は、「文字から離れることはない」とは言うものの、また「文字

の中にもなく」、それは性情の自然な表出の中にあると言うのであった。

元好問は金から元へその仕官を移し、元が金を滅ぼした当初には、「中州は碎けて亡び、文章の氣勢も息絶え絶えの時、衰亡を立て直し破壊を救うという希望が元好問に託された」(徐世隆《遺山集序》)のだ。当時、李治・郝經等の詩を論じる者たちは、概ねみな元好問の見方を継承し、儒家の伝統的詩論によって宋詩の変化の新しさを批判し、詩は「性情を歌い上げることで、《詩經》のような詩篇となる」(郝經《与撒彦学論詩書》)のだから「古人が事柄によって詩文を作るとき、声律の問題には注意せず、伝えるべき気持ちだけを主とした」(李治《敬齋古今註》)事に倣えと主張するのである。

金元時期の宋代詩歌発展に対する総括は、元が南宋を滅ぼした後にようやく新しい展開があった。当時南方の文化は北方よりも高かったので、北の元が南宋を滅ぼして後、元の文化の中心が南に移ると、南宋から元に出仕した文人たちが文壇の主導的な地位を占めた。よって文学批評もまた宋末の主題と観念を継承し、江西・四靈・江湖派などの詩派についての評価と総括を行ったのはまことに自然であった。例えば袁桷⁽¹⁷⁾が理学家の詩を「ごちゃごちゃして粗っぽく、ばらばらで詩になっていない」(《楽侍郎詩集序》)、江西詩派を「まともな響きが欠落し、醇朴さとは大違い」(《書梅聖俞詩後》)、四靈の詩を「歌われる風や雲、月や露などは、晩唐の哀切さの引き写し」(《書鄭潜庵李商隱詩選》)だと批判する。なかでも注意しなければならないのは、宋王朝の滅亡にしたがって、宋代の政治と文化への総括が切実な課題となっていたことだ。当時は江南の士大夫は社会への関心を多く持っていたし、派閥の偏見や思想上の心配は少なかったので、宋詩への認識も深まって、その欠点を指摘するばかりでなく、意識的にその原因を探ろうとした。例えば趙文⁽¹⁸⁾は宋末の詩壇の弊害が詩人の人格と関係することを指摘している。彼は江湖派の詩人たちが、「富と名誉と出世を求めるものの、辛い仕事は努めて避ける事ばかりを考えている連中である。その姿はいびつで、精神も損なわれている」(《蕭漢傑青原樵唱序》)と批判する。戴表元⁽¹⁹⁾の場合、これは世の中の気風と関係があると考えた。彼は、「その当時の賢人たちは性や命といった問題を議論していたし、その下の連中は手紙にくだらない戯れ文や科挙の試験場で書くめっちゃくちゃな文をならべるばかりで、世間の喜ぶ流行の波に遅れまいと忙しく、詩作に打ち込もうとするものがいなかった」(《方使君序》)と指摘する。これを要するに、道学と科挙が詩作を圧倒したのだった。また「贅沢な暮らし」に「くたびれて頭がくらくらした」ことが詩作の足を引っ張ったのかもしれない(《呉僧崇古詩序》)。そこで彼は詩を作る事が「人々の心や社会のための務めにもとづく」もの

であるべきだという視点を示したのである（《張仲実文編序》）。戴表元の弟子の袁桷は更に歩を進めた。袁桷は非難の矛先を直接理学に向け、「理学が興ってより詩作の道が廃れ始めた。概ねみな細やかな模写によって道ならぬものを作るようになった」（《楽侍郎詩集序》）と公言する。袁桷は唐代と宋代の詩の違いを論じて、宋人は理によって詩を作り、詩歌の本来の特徴である芸術特徴を強調する時に、賦・比・興を主とせねばならず、細やかに模写し、特定の「韻律」、「体裁」を持たねばならないけれども（《題閔思齋詩卷》）、唐の詩人は「韻律は流れるようで、情緒の深淺は、音律の響きに納まる」（《書番陽生詩》）もので、詩歌の持つ審美的要求にぴったりだと批評する。袁桷のこの論は嚴羽の考えにかなり近く、韻律や体裁で詩を論じることが、その後の格調派の詩論にある程度の影響を与えることになった。

当時の人々の宋詩に対する反省は、視角に違いがあったり、観点も異なっていたとはいえ、共通するところがあった。それは宋代の詩壇の流派の觀念に反対する点である。戴表元が《洪潜甫詩序》の中でこう指摘する。つまり宋詩には、梅聖俞の「冲淡」さ、黄庭堅の「雄厚」さ、永嘉四靈の「清圓」さなどのように、唐詩の境地にまで達したと言えるものもあって、そこに評価すべき価値がないわけではないけれども、その後の人が流派の觀念に囚われてしまい、梅聖俞・黄庭堅・四靈を学ぶことばかりを考えて、唐代の詩を学ぶことを考えなかった。よってその境地は日々に偏狭になり、詩の格調もますます低くなったのである。そこで戴表元は、「詩のことだけを語る者は、共に言葉を交わせない」（《李時可詩序》）と述べ、「味わい深い食物のような、安楽な居住まいのような、暖かい衣服のような」ものと言う例えを挙げて、詩の美しさを喩えたのである。つまり詩歌は情性の自然より生まれ来るものであり、意識的な追求から生まれるものではなく、ましてや流派にとらわれた見解、すなわち必ずやある流派のある詩体を学ばねばならないといった所などからは生まれるものではないと言うのである。この観点は明らかに嚴羽とは異なる。嚴羽は識見を重視していた。《滄浪詩話》には「そもそも詩を学ぶときには識見を主とする、正しい門から入るべきで、志は高くしなければならない」と述べている。嚴羽は宋人の流派や、晩唐の流派はうち破ったが、今度は盛唐の一派を、李白杜甫の一派を立ててしまったのである。嚴羽の詩論は「妙悟」を説いたが、そこで悟るのは盛唐の詩人の境地であり、彼の語った「詩体」・「詩法」もまた派閥・流派の見識から免れていなかったのだ。戴表元の場合はそうではない。彼も古を師とすることを主張して、「詩を作る者は古に倣い、陶淵明・謝靈運以来の作品の気概をしっかりと理解せねばならない、よって筆をおろせ

ば近年の言葉などそこには見あたらない。」(《許長卿詩序》)と述べるけれども、彼は「詩というものとはひとえに人の性情から生まれるものである」(《珣上人刪詩序》)と考えていたので、古を師とするとはいえある種の風格やある種の文体を師とするのではなく、その人の性情の自然な発露を求めるべきだと言うのである。「無味の味があってこそ、食に珍味が表れ、無性の性があるからこそ、薬はあまねく効き、無迹の迹があってこそ、詩は人智を越えたすばらしいものとなる」(《許長卿詩序》)。というわけで古人の詩を学ぶ者は、雄渾・清圓から勁峭に至るまで、各種各様の風格を持つべきではあるが、優れた詩人ならある一つの風格の杵を必ずや逸脱するものだ。そして「無迹の迹」と言われる所まで詩作りが到達し、そこに詩として美しさを持ちながらも、それを雄渾とか清圓とかの一言で概括できないほどであるなら、それこそ「人智を越えたすばらしい」境地に至ったと彼は考えるのである。なるほど戴表元の「古を師とする論」は性情説の基礎の上に格調を論じるものであり、古人の詩歌に対してその思想から芸術的体裁までにわたる全体的な把握を求めたものであった。だから、彼は流派にとらわれた見解をうち破りつつも、それに代わる具体的な格調や作法は一切論じなかったわけである。

宋末元初の頃、江西詩派は江西地区でかなり大きな影響をまだ持っていた。当時、江西を原籍とする批評家、劉壘⁽²⁰⁾、呉澄⁽²¹⁾等は黄庭堅及び江西派の幾人かの詩人を評価していたが、後人の流派を立てるやり方には共に攻撃の態度をとっている。呉澄は《董震翁詩序》を作り、陳與義の詩が蘇東坡・黄庭堅に学びながらも、蘇東坡や黄庭堅に似てはおらず、「超然と悟境に入り」、「神化の妙」を得たと褒め称えている。これが董震翁となると、陳與義を学んで、いっそう「《文選》でもなく、唐詩でもなく、流派でもなく、江湖派でもない」と言う。「流派」とは江西詩派のことだ。呉澄が評価したのは陳與義と董震翁の彼ら独自の風格であり、江西詩派の中でも「似ているだけで良しとする必要はない」(《黄体元詩序》)所である。劉壘は《隱居通議》を著して、黄庭堅・陳師道の詩を評価したとはいえ、詩の創作に論が及ぶと、「黄庭堅・杜甫の響き」より、「陶淵明・柳宗元の味わい」へと遡るべきことを示した。その最高の境地となると《詩経三百篇》の「天地の根元、血の通った人間の性情」にあると言う(《雪巖吟稿序》)。この他、江西の趙文は詩が性情を主とし、お決まりの作法を説いたり一派を構える事に反対すると共に、宋人が好んで詩を論じることを批判して、「詩話が盛んになって、詩はますます昔より劣るようになった」(《郭氏詩話序》)と言う⁽²²⁾。以上のような流派を立てたがる時代風潮の中、方回⁽²³⁾が《瀛奎律髓》⁽²⁴⁾を著して、江西詩派を守ろうとしたのは、確かにかなり目立つものであ

る。とはいえ、方回は「一祖三宗」を掲げて、実際には江西詩派の門戸を広げ、また「この事（詩）は二つの道に分かれる」（《学詩吟》十首之七）と述べて、杜甫・黄庭堅・陳師道の他、別に梅堯臣・張耒を挙げてその上は盛唐を継ぐ者として一派とみなしてもいいので、江西詩派の流派を抜け出ようとする傾向はかなり持っていたように見える。

二 伝統的儒学への復帰の影響

金と元は同様に少数民族が中原に入を支配したもので、比較的に後れていた文化と先進的な漢文化との衝突過程を経験している。衝突の中で融合し同化して発展したのである。

《金史・文芸伝序》では、「世宗・章宗の世では、儒学の気風が大いに変化し、学校は日々に盛んで、士人は受験生の地位から宰相の地位まで絶えることはなかった。その当時、儒学者は専門家や名家の学を講じる者はいなかったといえ、しかしながら朝廷における皇帝の文書、隣国への書状などは光り輝き立派なものだったのだ」と書いている。この融合及び発展の過程が、金代の統治者が儒学を代表とする漢民族の伝統文化を吸収する過程でもあったことが知れるだろう。ここで注意する必要があるのは、伝統的な儒学と理学との区別である。伝統的儒学は堯舜から説きおこし、周の文王武王を模範として、王道を唱え、仁政を興し、君主を助け人々を文明に教化し、国を整え国家を治めることを仕事とするもので、その精神は外に向けられ、功績に重点をおくものだ。理学は宋代に興り、儒学の一派とは言いながら、義理について解釈し、性命について談論するもので、その精神は内に向けられ、その学問はまず個人が身を修め本性を養うことを重視する。金末元初の頃には、漢民族の伝統文化に対する吸収は、主に伝統的儒学の発揚の面に表れた。元が金を滅して以後、朱熹の学問がようやく北方へと伝わって来たが、当時の人々は理学の精神を余りよく理解することができなかった。郝經は次のように言っている。「二程は道学とは称したことがなかった。道学とはすなわち、禹・湯王・文王・武王・孔子・孟子の学問の事であり、また孟子・荀子・揚雄・王通・韓愈・歐陽修・蘇軾・司馬光の学問の事である。わざわざ別に名目を立てて面倒を引き起こす必要はないのだ」（《与北平王子正先生論道学書》）。よって元初に北方で流行したのはやはり伝統的な儒学であった。劉因は宋儒の「議論」の学が「虚空を刻み勝手に判断する」ものとして、漢代唐代の注釈の伝統を重視し、「古には經書史書の区別はなかった」（《叙学》）とまで述べて、儒家の經典と政治教化の密接な関係を強調している。その後元が南宋を滅ぼすと、南宋滅亡の反省から、朱熹の学問もある程度冷淡に扱われることになった。方回は江西・安徽一帯の学風を述べて「今の士人は

全く道学を講じず、詩文の学ばかりが僅かに残るくらいである。私は朱子の故郷に生まれた者である……朱子の没後まだ百年は経たないので、彼の義理の学を学ぼうとする者は、ここでは一人二人ではない」（《呉雲龍詩集序》）。朱子の学が尊敬され正統扱いされるのは延祐年間に科挙が再び始まって以後である⁽²⁶⁾。その影響もこのように主に南方の地区に限られていたに過ぎなかった。

金元時代の伝統儒学への復帰は、自然に当時の文学批評に深い烙印を与えている。元好問は嚴羽と同時期に宋代の詩歌の発展に対して総括を行い、同様に復古の主張を述べた。しかし、嚴羽が芸術風格の上での復古を主としたのに対して、元好問の場合は風雅の正体への復古を主とし、人間の性情に基づき、正か偽かを判断することがその詩論の基礎となった。彼ら二人にこのような違いが生まれた理由として、非常に重要な要素となるのが時代背景の違いである。南宋では理学が盛んに行われ、詩歌が理學化される傾向は日増しに進んでいた。だから嚴羽は「詩の善し悪しは理に関わるものではない」という「別様な趣」の説でこれを矯正しようとした。北方ではこれとは逆で、漢民族の伝統文化を保存すること及び儒学精神を発揚させるというせっぱ詰まった課題に直面していた。金が亡びた当時、「遼は仏教で亡び、金は儒学で滅んだ」という説があったので、元の統治者が漢族の伝統文化に対する疑惑を払拭するために、元好問は張徳輝の推薦のもと、わざわざ出向いて林観に会い、共にフビライに儒教大宗師の尊号を奉った。このような精神に基づいていたので、元好問の詩論は自ずから嚴羽とは違うものになり、伝統儒学が標榜した風雅の正体を抛り所とする事になったのだ。

郝經⁽²⁶⁾は元好問の弟子となったので、その詩論の精神も同様であった。彼は《六經》を詩文創作の最高の典範に掲げて、《六經》の精神は「真実」にあることを指摘した。つまり「真実しか用いない、真実があれば文が生まれる」、「《易》の文は真実の理である。《書》の文は真実の言葉である。《詩》の文は真実の情である。《春秋》の文は真実の政治である。《禮》の文は真実の作法である。そして《樂》の文は真実の音である。よって六經には内実のない文はなく、六經が生まれた三代には実のない飾りだけの者もいなかったのだ」（《文弊解》）と言う。これは道理・政事・言葉遣いを一つにして捉える儒家の伝統的な文学観であった。この精神に基づいて彼は漢から五代に至る詩二五〇篇を選び《一王雅》⁽²⁷⁾を作り、そこには「風刺や賛美を詠い、歌唱朗詠を繰り返して、中国の統一を重んじ、王道を明らかにし、これまでの賢人たちがまだしていないことを補おうとするもの」が選択されたのである。彼は、曹植・劉楨・陶淵明・謝靈運の詩が「大胆で美しさに

富み、豪壮で質朴なもの」とは言うものの、「政治を述べることは少ない」と批判する。彼が最も高く評価したのは杜甫の《北征》・《潼関》および柳宗元の《平淮雅》、韓愈の《聖徳詩》、白居易の諷諭詩だった。この評価は、極端に文学を政治の観念に組み込んだものである。郝経は当時フビライに知遇をえて翰林学士となり、フビライの命を受けて南宋へと使者に出ている。この書籍はちょうど彼が使者の途中、江蘇の儀徴で困難な状況にあった時編集されたものだ。その目的は、詩文の創作あるいは批評によって元王朝の政治教化の発展を推進するところにあった。

当時の文章の大家であった翰林学士王惲⁽²⁸⁾の文論もまた教化を主とし、風雅の正体を主とするものであった。彼は当時、幾人かの人が文章を綴るときに「細やかな文彩」を極められるのは文士ばかりだ、ということを批判して、「文章」と「事業」を一つの道に合わせ、文章が上手なばかりでなく、しかも「事態をはっきりと認識して」、「事態に直面してちゃんと実行する」べき事を主張した（《玉堂嘉話》）。故に彼も郝経同様にとりわけ白居易の風諭詩を称賛し、風諭詩が時事を指摘し改善を求めることは、「皇帝に奏す諫めの文章」のようだ（《長慶行酬暢純甫贈元白二集》）と考えたのである。しばらく後の翰林学士の中には文章で名を知られた程鉅夫⁽²⁹⁾がいた。程鉅夫が宋末元初の文風を論じて、「数十年来士大夫たちは風采を高め、文雅さを尊んで、誰も事業を成し遂げる実際の活動に気を向ける者はいなかった。頭ばかりの儒学者は武人を馬鹿にし、科挙出身者は地方の小官をいやがった。……わが国朝（元）では衆知と多くの力を結集し、国内を一つにし、倉庫管理の下っ端から宰相に至るまで、実際の才能で実際の功績を挙げずに、時代に不用なものを空談するものなど一人もいない」（《送黄済川序》）と言う。ここには文章に対する空言に反対し、実用に努めるという元初の役人たちの態度が非常にはっきりと示されている。この精神に則って彼は真古文⁽³⁰⁾（真実の古文）という概念を打ち出したのだ。所謂「古文」とは「三墳をまね、《大誥》に似せた」作品ではなく、「体・用をあまねく持ち、本・末を具え、始・終を備える」（《李仲淵御史行斎漫稿序》）ものでなければならない。ここに言う「末」とは文辞のことであり、「本」と「体」とは道理のことであり内実のことを指す。「用」と「始終を備える」とは、時の政治情況の観察を文章が補う力を強調するのである。これは郝経の提唱した道理・政事・文章を一つに合わせる文学観念と一致するものだ。

伝統的儒学の文論の精神は、「風雅の趣」という言葉で概括できるだろう。そこには二つの特徴がある。一つは現実の状況を重視すること。文を論じれば現実に関わることを重

んじ、詩を論じれば真情を主として、実際の情況に基づいて生まれた真情を掲げ、目的を持って詩文を作り、政治教化に役立つものでなければならない。もう一つは「雅正」を主とする。王者の政治を広める事を「雅」とし、封建的倫理の綱領に沿うことを「正」とするもので、これに違うものは「変」として、「正」を押し広め「変」を挫くのである。この二つの特徴のうち、前者は伝統的な儒学の文論が持つ積極的な意義を体現したものだが、後者の方は明らかに文学の発展を縛り制限するものだった。金元時代の伝統儒学の復帰が文学批評にもたらした影響も自ずから先の二つの特徴を内包することになるが、時代によってその現れ方は違っている。一般的に言うと、金から元への交代期、元が統一した当初は、蒙古の統治者は新しい帝国をうち立て強固にせねばならないという問題に直面し、漢民族の伝統文化に学ぼうというかなり切迫した要求があった。よって当時の文論の殆どが真実の情感を重んじて、經典に基づいて実際に役立つべき事を呼びかけている。ところが、延祐元年(1314)⁽³¹⁾に科挙の試験が復活すると、状況に変化が起こる。当時は元が中国を統一してすでに三十余年、堂々たる大国として、周囲に並ぶものがない勢いとなっていたので、詩文によって元王朝を太平の世であると粉飾しようとするのだ。この時、詩で有名だった虞・楊・范・掲の四家⁽³²⁾は詩を論じるのも好んでいた。その論では「雅正」を帰着点にするのが常であった。例えば虞集は「私は、時代には上がり下がりがあり、風気には盛衰があって、詩文の有様もそれに従うものであると考えている。その言語表現が安穩で内容が深遠なものは、たいてい立派な時代の響きなのである」(《李仲淵詩藥序》)と言っている。虞集は晩唐・宋末に詩体が変わったことを批判して、古代の醇朴で典雅な風格を主張するとともに、当時の詩歌を模範として掲げた。なぜならそれは今「国家は長い間世界を治め、天地自然の気は満ち、醇朴敦厚の風気がおこり、異才の人が次々に表れ、文物は燦然と輝いている。伝え聞く古の盛時といえ、これを越えることはない」(《国朝風雅序》)からである。范梈も楊載の文集に序を作り六朝・宋末の詩体の変化を批判する。そして、「今や天下の文章家は、「平和で立派に治まったという響き」を持たねばならないのだが、楊載の詩となると「その氣勢は広く朗かであり」、「雅正の道」に十分かなったものだ」と指摘する(《楊仲弘集序》)。掲傒斯の《詩宗正法眼藏》もまた同様の観点を持っていた。五言詩の詩法を論じて、「そこに託す寓意は深遠であり、それを託す言葉は温厚で、ゆっくりと変わり、あたふたとししないものでなければならない。……哀しみや喜びの感情は内に込められて過度には表れず、褒貶は婉曲で直接的には見えず、《詩經》の残した遺訓に従わねばならない」と言う。

当時の詩論がこんな風であるから、文論もまた似たようなものであった。歐陽玄⁽³³⁾は元の中期に官職を歴任し、宋・遼・金の三王朝の歴史を修訂する総裁官になったので、一時期朝廷の文書は彼の手になるものが多かったが、彼の文論もまた雅正を主としたものであった。彼は南宋の士人を批判して、「根幹のない学問に従事し、科挙の試験によって思考は荒れ果て」、彼らの作品も「でたらめや下らないことばかりで、名家とは言えなかった」が、「わが元が龍の如く興るや、雄渾重厚の気風でそれを変え、最高の文章が生まれたのである」(《潜溪後序》)と言う。当時蘇天爵⁽³⁴⁾は《国朝文類》⁽³⁵⁾を編集し、陳旅がこれに序を作り、そこでなされた選抜の基準を述べ、「政治に関わりを持ち、世を教え導くものであること。世俗の模範となる典雅な作品を選び、歴史家の褒貶の参考になる論述を選んでいる。この条件を満たさないものは、いくら良くても選ばないのだ」と言う。蘇天爵の《国朝文類》は元統二年(1334)に編集されている。当時元帝国は表面上の強大さと繁栄は依然維持していたので、文臣たちは政治と文学を一つにする視点で繁栄の世の音楽を奏でたのである。しかしながら、良いことは長くは続かない。しばらくすると、農民反乱の火の手が全国にくまなく起こり、元の王朝は急激に衰微して行く⁽³⁶⁾。文学批評の傾向にもそれに従って変化が起こった。伝統的儒学思想の指導のもと、風雅の道の積極的な影響が再び盛り返したのである。そこには政事と道理と言葉の三つを一つに合わせ、経典を宗とし用を致すという観点をもつものもあれば、文学が時代を補い褒貶や風論の作用を持つように求めるものも出た。前者は宋濂が代表であり、後者は劉基が代表となる。彼ら二人の文学批評は通常では明代部分に入れられて叙述がなされるけれども、彼らの重要な文学の論文は共に元の末に書かれたものである。その文学思想が生まれたのは、主に元末の義勇軍が巻き起こした大動乱を背景としたものでもあって、皇帝権力が盛上がった大統一が背景にあったのではなかった。宋濂は明初の「開国の文臣の第一」となり、明初の文治統治にふさわしい文論を書いてもいるが、劉基となると明代にはいって後は詩文を談論することはほとんどなくなっている。よって、二人の文学批評の本筋を深く検討しようとするれば、やはり元代の儒学伝統と元末の社会背景を結びつけて考えねばならない。

(以下続稿)

注釈

(1) その原因としては、「翻訳に当って」部分で既に指摘したが、金元が宋と明という

漢族国家に挟まれた異民族国家ということが、文化の継承や発展にブレーキをかけたと考えられる。しかし、これとは別に所謂知識人によって支えられる「文化」と、それを巧妙に取り込んで統治しようとする政治理論との関係はあらためて考え直す必要はあるだろう。政治理論と文化現象の間には大きな相互関係があり、異民族に統治が変われば、統治理論が従来のものとは異なる以上、従来の文化も影響を受けるはずだからである。

(2) 元は遼や金、清などの異民族国家とは異なり、漢民族文化を吸収・同化するという点では、敬意を払わなかった王朝であった。従って、元はモンゴル至上主義を掲げ、漢民族文化に対する理解が少なく、当初科挙は実施しなかった。科挙が復活したのは、1315年のことである。しかし、科挙が復活したと言っても、蒙古人、色目人の支配階層が有利となるシステムで、科挙が本来持つ実力主義とはかけ離れていた。これは、優秀な文化を持つ漢民族を警戒した政策であり、実力本位の科挙は元朝を通して行われることはなかったと言えよう。この時代大いに戯曲が発展した理由の一つに元人貴族の戯曲愛好が指摘されていることは注意したい。原書第四編第五章第二節戯曲批評参照。

(3) 蒙古族はもともとシャーマニズムを信奉し、万物の霊を信仰していたので、特定の宗教や哲学はなく、また儒学思想にも関心がなかった。更に、当初科挙試験は廃止されていたので、宋代においては科挙試験の際必須であった儒学、特に宋代に盛行した理学思想の習得は停滞状況を呈していた。しかも、金は儒学で滅んだという説もあって、儒学によって束縛を受けることが嫌われた。科挙が復活すると、朱子学が正統的に扱われるようになるが、その影響は南宋の基盤であった南方を主としていたにすぎなかった。

(4) 北宋中期に梅堯臣や歐陽脩らによって唱導された宋詩の風格は、その後王安石、蘇軾、黄庭堅らによって大きく花を開かせると言える。しかしながら、政治上の対立、すなわち新法党と旧法党との対立の中で、詩風の展開も大きな影響を受ける。特に、神宗の元豊二年(1079)に蘇軾が詩文中に時政を批判したとして御史台の獄に繋がれ、彼の文学上の友人、閣僚ら29人が連座して処分を受けたことにより、蘇軾らの作品が禁まれることとなる。ところが、元祐元年(1086)に旧法党の復活と共に蘇軾は中央に帰り、中書舎人、翰林学士、知制誥等の要職についた。これによって、蘇軾らの詩風が復活し、それ以前に比べて詩風が大きく変化したのであった。

(5) 江西詩派は、呂本中(1084~1145)、字は居仁が《江西詩社宗派図》を作成したことから意識された詩の流派である。《江西詩社宗派図》のなかで、呂本中が黄庭堅を李白・杜甫以降衰えた詩風を振るい起こした最大の詩人として位置づけたことによって、黄庭堅

は江西派の宗師と見なされるようになった。

(6) たとえば、胡仔《苕溪漁隱叢話前集》巻48の「居仁の此の図の作は、選擇精ならず、議論公ならず、余是を以て之を辨ず」という記述は、江西詩派そのものについて疑義を唱えている。

(7) 元好問(1190~1257)、字は裕之、号は遺山、太原秀容(今の山西忻県)の人。祖先は拓跋氏、興定5年(1211)の進士。金が滅亡した後は仕えなかった。『遺山先生文集』がある。「翻訳に当って」部分参照。原書第四編第二章第三節に詳論。

(8) 『中州集』10巻は、金一代の詩の全集といえるもので、採録された詩人は249人で、それぞれに詩人の小伝を付している。

(9) 四靈とは、永嘉四靈のことで、いずれも永嘉出身の徐璣(1162~1214)号は靈淵、徐照(?~1211)字は靈暉、翁卷(生卒年不詳)字は靈舒、趙師秀(紹熙元年進士)号は靈秀、の四人のことを指す。彼らの字号に靈字を含むことにより、永嘉四靈と名付けられた。彼らは唐詩の復活を主張したが、その詩とは中晩唐の詩であり、特に中唐の賈島と姚合の淡枯な詩境を規範としたので、黄庭堅を宗とする江西詩派とは一線を画していた。

(10) 江湖派とは、臨安の書肆の主である陳起(?~1256?)が《江湖集》を刊行したことから名づけられた一派である。この《江湖集》のシリーズに名を連ねた詩人達を江湖派と呼ぶ。江湖派の詩人は崇寧年間から南宋末頃まで活躍した。代表的詩人としては戴復古や劉克莊らがいる。彼らは江西詩派が杜甫詩を師とすることに反対し、永嘉四靈の創作思想を発展させた。

(11) 嚴羽、字は儀卿、又の字は丹丘、号は滄浪逋客。邵武(今の福建)の人。生卒年は未詳。彼の作品はその多くが散逸しており、後人が搜輯して《滄浪吟卷》3巻を編纂した。この巻1が《滄浪詩話》である。その中で、彼は蘇軾や江西詩派の宗祖である黄庭堅の詩風を批判している。原書第二編第五章にて詳論。

(12) 李純甫(1185~1231)字は元純、号は屏山居士、弘州襄陰(今の河北揚原)の人。承安2年(1197)の進士。趙秉文と並ぶ金代を代表する批評家。同様に古典重視をとえながら、趙秉文が学問を重視するのに対して、彼は心に基づく自由さを重んじて、後に影響を与えた。著述が豊富であったがその多くは散逸しており、彼の作品は《帰潜志》《中州集》《金文最》等に散見されるのみである。原書第四編第二章第一節で詳論。

(13) 王若虚(1174~1243)字は從之、号は慵夫、また滹南遺老と言う。藁城(今の河北に属す)の人。承安2年(1197)の進士。刺史、著作郎、翰林学士を歴任した。金が

滅びた後は出仕しなかった。議論好きで知られたが、抽象論のみに終わることを嫌い現象的な裏付けを重視した。《溇南遺老集》がある。第四編第二章第二節に詳論。

(14) 趙秉文(1159～1232)字は周臣、晩年に閑閑老人と号した。磁州滏陽(今の河北磁県)の人。大定25年(1185)の進士。世宗、章宗、衛紹王、宣宗、哀宗の五朝に仕え、礼部尚書、兼侍読学士に至った。当時の文学風潮に対して、古典の重視と学問の蓄積を主張した。その点同様に古典重視を時ながら「心を師」とすることを重視した李純甫には不満を持ったという。著述は豊富で、晩年には自ら《滏水集》を編集した。原書第四編第二章第一節参照。

(15) 金王朝はモンゴルの侵攻により貞祐2年(1214)5月に黄河の北を捨てて南へ逃げた。これを貞祐の南遷と言う。

(16) 元好問の文学批評として後世に名高いのが《論詩絶句》三十首である。絶句形式で詩を論ずるのは、盛唐の杜甫の《戲為六絶句》を創始とし、杜牧の《読韓杜集》、李商隱の《漫成五章》、宋に至っては呉可の《学詩詩》、戴復古《論詩》十絶などがあり、金では王若虚が蘇軾、黄庭堅、白居易らを論じた絶句八首がある。しかし、これらはいずれも一時の感慨を述べたもので、僅かに一家や一流派を論じたにすぎない。元好問の《論詩絶句》三十首は、これら先行の作品とは大きく異なっている。それは、漢魏以来、下は宋末に至るまで千年余りの作家作品、詩派詩風を評述しており、作家論を主体としつつ、芸術創作の原理にも言及している。これは、金が南に渡って以来の文学状況に対する批判として生まれたもの。そこでは、魏晉を「正体」とした視点が示され、中唐以降には不満が示されている。作成されたのは、元好問の自注より、金の興定元年(1217)で、彼28歳の時の作。原書第四編第二章第三節に詳論。

(17) 袁桷(1267～1327)字は伯長、清容居士と号した。鄞県(今の浙江寧波)の人。若い時に茂材異等に挙げられ、麗澤書院山長となる。大徳初に推薦されて翰林修撰となった。至治元年(1321)侍講学士に遷った。その論は宋詩への反省から出発し、建安・黄初の時代へ目を向けることになった。宋から明代にいたる文学観の発展において重要な位置を占めると言われている。文集には《清容居士集》がある。第四編第三章第三節に詳論。

(18) 趙文、(生卒年不詳)。字は儀可、号は青山。廬陵(今の江西吉安)の人。南宋が滅ぶと、閩(福建)に入り、文天祥に従い戦うも敗れて故郷に隠遁する。後、招聘に応じて東湖書院山長となる。当時、異民族の支配を受けたことによって、儒家中心の漢族の文化に対する反省も行われ、鄧牧が封建制度の合理性に懐疑を指摘したが、文学批評の分野

では趙文が「畸人」を自認して「後世の詩人は中古の樵夫に及ばない」と述べ、明代の李夢陽「詩は天地自然の音」説の先声を成した。《青山集》がある。第四編第三章第四節に詳論。

(19) 戴表元 (1244～1310) 字は帥初、または曾伯、奉化 (今の浙江に属す) の人。南宋の咸淳年間 (1265～1274) の進士。建康府教授となる。元に入ると長く仕えなかった。大徳 8 年 (1304) 始めて出仕し、信州路教授となったが、すぐに病でもって辞職した。元初、南方の文人は殆どが宋から元に入ったものであった。そこでは宋末の文風に関する検討も行われ、作者や社会の両面で変化を求める傾向が現れた。戴表元はその代表とされる。《剡源集》がある。第四編第三章第三節参照

(20) 劉壘 (1240～1319) 字は起潜、号は水村、南豊 (今の江西に属す) の人。37 歳の時、南宋が滅亡し、その 18 年後に推薦されて本州学正となり、後に延平教授となった。当時東南では、唐を重んじる傾向があったが、方回などのように宋の江西派を継いだものもいた。劉壘はこれを折衷したもので、その批評は雑ばくな感がある。著に《水雲邨稿》および《隱居通議》31 卷。第三編第三章第四節参照。

(21) 呉澄 (1249～1333) 字は幼清、撫州崇仁 (今の江西に属す) の人。南宋の咸淳年間に進士に挙げられるが、及第せず、故郷に帰り草屋を築きそこで学問を講義したので、草廬先生と称された。元の至元 23 年 (1286) 程鉅夫が詔を奉じて賢人を江南に求めた時、徴せられて都に至るも母の老いによって故郷に帰った。後、翰林学士にいたり《英宗実録》の編纂に携わり、それが終わると職をすてて南に帰った。《呉文正集》がある。当時の名儒で、陸氏の心学の影響を受けて、作者を中心とする現在重視の文学批評となっている。第四編第三章第四節に詳論。

(22) 周知のように、詩話というジャンルは、北宋の歐陽脩の《六一詩話》を創始とする。詩話が宋代に盛んになったことの証左としては、今日確認できる宋代の詩話が 140 余りの多数にのぼることが挙げられる。

(23) 方回 (1227～1307) 字は萬里、号は虚谷。歙県 (今の安徽に属す) の人。南宋の景定 3 年 (1262) 別省に登第し、知嚴州となった。元に入り、建徳路総管に任ぜられた。宋末の江西派の立場から脱することなく、彼が唐宋時代の律詩を選評した《瀛奎律髓》にも江西派の好みが強く現れている。他に《桐江集》8 卷、《桐江統集》36 卷。第四編第三章第二節に詳論。

(24) 《瀛奎律髓》49 卷は作品の題材に従って、唐宋の律詩を選評したものである。自

序に「律とは何ぞや。五、七言の近体なり。髓とは何ぞや。皮を得て骨を得るの謂ひにあらざるなり」、「選する所は、詩格なり。注する所は、詩話なり。学ぶ者は之を求め、髓は是より得べきなり」とある。《瀛奎律髓》は、南宋が滅亡した後の至元 20 年 (1283) に完成し、時に方回は 57 歳で、彼の学問の成熟時期である。《瀛奎律髓》には方回の詩学の精髓が込められていると言えよう。

(25) 金も元も異民族の王朝であったけれども、科挙の受容に対してはその態度が大きく異なっていた。遼を滅ぼし、北方の中国一帯を領有した金は、遼で行われていた科挙制度を受け継ぎ漢化政策を採ったからである。特に、世宗時代 (1161~1189) を中心に科挙は盛んに行われ、多くの官僚を登用した。一方、元はモンゴル至上主義を掲げており、漢文化社会に長く根づいた科挙制度に全く関心をもたなかった。科挙が復活したのは、第 3 代仁宗の 1314 年のことであった。漢民族には待ち望まれていた科挙も、実質的には民族間で差別があり、更に算術などの実務を資格試験に入れるなどして、従来のものと少し違っていた。

(26) 郝経 (1223~1275) 字は伯常、澤州陵川 (今の山西晋城) の人。若い時に、戦乱に遭い、河北に移り、元の將軍張柔、賈輔に礼遇されて、その蔵書を読むことができた。その後、フビライの王府に入り、厚い信任を受けた。フビライが王位を継承した後、翰林学士を以て、国信使に充てられ、南宋に派遣されたが、賈似道によって阻まれ、真州に囚われとなること 16 年、至元 12 年 (1275) に赦されて北に帰還したが、まもなく病で亡くなった。代々儒家の家柄で、漢文化の保存のために六経を崇拜し、文学批評でも政治や道徳・義理を強調した。《陵川集》が残る。原書第四編第三章第一節に詳述。

(27) 《一王雅》とは、郝経が真州で囚われている期間に、漢から五代に至るまでの 221 人の詩、250 篇を選んだ総集である。彼が選んだ基準ははっきりしていて、その作品が王道を述べたもの、世事を補う性格をもつものである。なお、この部分、原文では「150 篇を選び」という既述になっているが、詳述される部分では「二五〇篇」と書いており、おそらく誤植と思われるので、翻訳では 250 篇に改めた。

(28) 王惲 (1227~1304) 字は仲謀、号は秋澗、衛州汲県 (今の河南に属す) の人。中統 (1260~1263)、至元 (1264~1294) 年間に翰林修撰、監査御史、河南、河北提刑按察使等の職を歴任した。模倣を戒め社会効果を持つべき事を主張した。《秋澗集》100 巻がある。原書第四編第三章第一節に詳述。

(29) 程鉅夫 (1249~1318) 初名は文海、建昌 (今の江西南城) の人。翰林集賢直学士、

山南江北肅政廉訪使、翰林學士承旨等の職を歴任した。南方から元朝に使えた文人を代表する。宋末の陳腐で技巧的な文風に対して、平易で明快な文風を興し、元代の古文学を隆盛を導いたという。《雪樓集》がある。原書第四編第三章第三節に詳論。

(30) 程鉅夫の真古文とは、彼の《李仲淵御史行齋漫稿序》の中で、「予、御史李君仲淵を識りてより後、天下に真に古文を以て任と為す者有るを知る」と言及することに基づく議論で、程鉅夫が提唱した古文とは、奇古を為さず、空言で道を理めず、内容を充実させ、文字は平易で実用的文章のことを言う。

(31) 原文では延祐元年を1214年とするが、それは誤植で1314年の誤り。注釈者により訂正する。

(32) 虞とは虞集(1272～1348)のこと。彼の字は伯生、号は道園、世間では邵庵先生と呼ばれた。先祖の本籍は仁寿(今の四川に属す)で、後に崇仁(今の江西)に移った。幼き時、呉澄について学び、大徳初に推薦されて大都路儒学教授となり、国子祭酒、奎章閣侍書學士となった。元代中期の正統派の観点を代表する。《道園学古録》、《道園遺稿》がある。第四編第四章第一節にて詳論。

楊とは楊載(1271～1323)のこと。字は仲弘、浦城(今の福建に属す)の人。四十歳になっても仕えず、布衣のまま翰林国史院編選官を授けられた。延祐2年(1315)に進士に登第し、饒州路同知に任ぜられ、寧国路総管府推官の時に卒した。

范とは范梈(1272～1330)のこと。字は亨父、また德機、清江(今の江西に属す)の人。左衛教授、翰林院編修官を歴任した。《范德機詩集》、《木天禁語》、《詩学禁臠》がある。

掲とは掲傒斯(1274～1344)字は曼碩、龍興富州(今の江西豊城)の人。翰林侍講學士を歴任し、遼、金、宋の三史の総修として編集に当たったが、遼史が出来上がった後、病没した。諡は文安。《掲文安公全集》《詩法正宗》《詩宗正法眼藏》がある。以上第四編第四章第三節に詳論。

(33) 歐陽玄(1274～1358)字は原功、号は圭齋、瀏陽(今の湖南に属す)の人。延祐2年(1315)の進士。順帝の時、宋、遼、金三史の編集の総裁官となった。官は翰林學士承旨に至った。《圭齋集》がある。第四編第四章第一節にて詳論。

(34) 蘇天爵(1294～1352)字は伯修、真定(今の河北正定)の人。康熙、呉澄、虞集に従って学んだ。監察御史、集賢侍講學士などの職を歴任した。能吏と称された。彼の古を師とする議論に特色はなかったが、宋元時代の儒学の正統観念であったので、元代では

長い間影響があった。《滋溪文集》がある。第四編第四章第一節参照。

(35) 《国朝文類》70 卷は《元文類》とも呼ばれ、蘇天爵が朝廷に入り 20 年の歳月をかけて元統 2 年(1334)に完成させたもので、同時に彼は《国朝名臣事略》15 巻も作った。

(36) 元王朝は、世祖フビライ、第二代成宗(1294~1307)の頃までは比較的安定していたが、成宗の後は後継ぎ問題で内乱が起こり、また権臣が実権を握るなどして、第三代武宗(1307~1311)から第十代寧宗(在位 1332)までの 8 人の皇帝は 24 年の間にめまぐるしく交代し、統制がくずれ、綱紀が乱れるなど収拾がつかなくなりつつあった。こうした中、元朝最後の皇帝・順帝(1333~1370)の初年は水害・干ばつが起こり、1344 年には黄河の大氾濫が起こり、罹災民は 500 万人に達した。この罹災民を元は治水工事に無償でかり出したことが、反乱を誘発するきっかけとなり、そうした民衆と元朝打倒を掲げた仏教の秘密結社白蓮教が結びつき、反乱の火の手が各地で燃え広がり、元は滅亡へと向かうのであった。